

**書籍** 舞台医学入門**新しい医療分野、“舞台医学”とは 監修者の武藤芳照氏に聞く**

スポーツ医学の進展に伴い、野球肘や女性アスリートの無月経などスポーツ障害に対する認知・治療は著しく向上した。それに対し、演劇や音楽、舞踏といった芸術活動では同じ動作の反復・継続により種々の身体障害が生じること、激しい動作に伴う外傷のリスクが高いことはあまり知られていない。欧米ではダンスや音楽と医学に関する団体が設立され、研究が進んでいるという。このたび、舞台医学(stage medicine)を初めて総合的に解説した入門書が刊行された。新たな医療分野“舞台医学”について、監修者で東京健康リハビリテーション総合研究所長／東京大学名誉教授の武藤芳照氏に聞いた。



武藤芳照監、山下敏彦、田中康仁、山本謙吾編、B5判、92ページ、定価3,000円+税、新興医学出版社



——舞台医学とは、どのような医学領域なのですか。

舞台医学の主な対象は、プロ・アマチュアを問わず舞台上で演じる、歌う、奏でる、踊るなどのさまざまな身体表現を行う舞台芸術家です。治療対象には腱鞘炎、変形性関節症、ジストニア、頸椎症、捻挫、骨折をはじめ、整形外科系を中心にさまざまな疾患が含まれます。

——日本における患者の現状や研究の動向、本書刊行の経緯について教えてください。

対象が幅広いので、子供から高齢者まで患者・予備群は多数存在すると思われます。しかし、舞台医学という視点での診療・統計は行われていないため、正確な患者数や転帰などは分かっていないのが現状です。

専門医はほとんどいない状況ですが、身体表現者の外傷・障害を診ている医師は多数存在します。それらの

医師をネットワークで結び、勉強会やケースカンファレンスを開催し、興味や問題意識を共有することがこの領域の発展に資すると考え、舞台医学研究会を立ち上げました。現在、研究会の世話人である山下先生、田中先生、山本先生の3氏が持ち回りで開催しています。

また、入門書があれば医師・研究者をつなぐサークルの形成、支援者の理解に役立ちますし、研修医や医学学生、高校生が「こんな分野があるのか、面白そうだ」と舞台医学に興味を持ち、関連書籍を読み考えるきっかけを提供できると考え、本書を刊行しました。

**身体構造や働きに対する意識が希薄**

——患者にはどのような特徴がありますか。

まず、表現者であるという誇りと自覚を持ち、芸術表

現を深めることに関心を抱き、そのための努力を厭わない点が共通しています。スポーツと同様に全ての芸術活動は身体活動を伴い、より良いパフォーマンスを発揮するためには身体構造や働きへの理解が不可欠ですが、そうした認識がアスリートに比べて表現者では薄い点が特徴として挙げられます。

例えば、バレエのレッスンや楽器の演奏でも、スポーツの基礎練習でも、同じ動作の繰り返して身体に過剰な負荷がかかるとオーバーユース症候群を来します。ところが、負荷を減らす楽器の持ち方を教えたり、ピアノのレッスン時に指の成り立ちを説明する指導者はほとんどいません。身体構造・機能に対する理解、意識が希薄であることの表れといえるのではないのでしょうか。

**医学の進化と芸術の発展の相乗効果を目指す**

——今後の展望についてお聞かせください。

研究会は、外科以外の診療科を加えて最低10年は継続し、日本舞台医学会への発展を視野に入れつつ、学会誌や入門書に続く概論の刊行を目指しています。

次に、舞台医学クリニックの開設があります。全国の専門医の協力を仰いで症例を集約することで、患者と医療者の双方がメリットを享受できるでしょう。

最後に、ステージ医、ステージトレーナーなど専門家の養成を考えています。これらの活動を通じて舞台医学の領域を追究・進化させることで、舞台芸術と文化の発展に寄与できることを願っています。



武藤氏インタビューの  
全文はウェブ版で

メディカルトリビューン で検索